

官学連携による「宇治学」副読本作成と 現場での活用に関する研究 I

橋本 祥夫¹・森 正美²・鵜飼 正樹³・寺田 博幸⁴
澤 達大⁵・市橋 公也⁶・辻 弘一⁷

1 はじめに

宇治市立小中学校では、小中一貫教育の特色ある教育活動として「総合的な学習の時間」（以下、総合的な学習）を「宇治学」と称し、「宇治で学ぶ、宇治を学ぶ、宇治のために学ぶ」をコンセプトに学習を進めている。

「宇治学」については、各中学校ブロックが、そのブロックの地域性や児童生徒の実態を踏まえた計画を作成し実施している。しかし、指導内容は、教科書がないこともあり、学校及び指導者の教材準備に依拠しており、「宇治学」の授業づくりについては、それぞれのブロックや学校の相当の負担となっていることが大きな課題である。

そのため、宇治市立の全小中学校で共通に学ぶ内容を重点単位として示すとともに、探究的な学習の切り口となる宇治市版の副読本を作成することとなった。

本研究は、副読本の作成にあたり、本学の教員と宇治市教育委員会との連携による共同研究であり、本学地域協働研究教育センターの「地域志向協働研究」として取り組んでいる研究である。平成26年度から3か年の研究指定を受けて取り組み、本年度が2年目となる。したがって、最終的な研究結果が出ているわけではない。ま

た、本研究の重要な柱となる副読本の作成は、まだ作成途上である。副読本が完成し、各学校で副読本を基に授業が展開され、児童生徒にどのような力がついたのかを検証するには、まだ時間がかかる。そこで、長い時間をかけて本研究を積み上げていく上で、研究成果をまとめ、次年度の研究につなげていくことには大きな意義があると考え、過去2年間の研究成果をまとめることにした。なお、本研究は研究途上であるため、研究の方向性は今後変更される可能性があることがあることを申し添えておく。

（橋本祥夫・市橋公也）

2 研究の目的と概要

(1) 「宇治学」の目標

「宇治学」の目標は、学習指導要領に示された総合的な学習の目標や内容の確実な定着、小中学校を通した系統的な指導の充実を図ることを目的に、宇治市教育研究員「宇治学」部会により、京都文教大学の共同研究者と連携を図りながら、次のように設定した。

「地域社会の一員としての自覚を持ち、ふるさと宇治をよく知り、諸問題に目を向け、主体的、創造的、協同的に取り組むことで、よりよく問題を解決する資質や能力を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。」

(2) 研究の目的

本研究では、宇治市教育委員会と京都文教大学の教員が共同（協働）して、「宇治学」の副読本を作成する。また、教員の授業改善や授業

1 京都文教大学臨床心理学部教育福祉心理学科准教授
2 京都文教大学総合社会学部総合社会学科教授
3 京都文教大学総合社会学部総合社会学科教授
4 京都文教大学臨床心理学部教育福祉心理学科教授
5 京都文教大学総合社会学部総合社会学科准教授
6 宇治市教育委員会教育支援センター一貫教育課副課長
7 宇治市教育委員会教育支援センター一貫教育課総括指導主事

力の向上に貢献する。「宇治学」副読本の作成は、その活用を通して、「宇治学」の活性化を図り、児童・生徒に、地域社会の一員としての自覚を持って「ふるさと宇治」を愛し、よりよい宇治を築こうとする自主的、実践的態度を養うことを目的とする。

(3) 宇治学副読本編集方針

「ふるさと宇治」についての学びを通して、「宇治学」の目標を達成するための副読本は、従前のような内容解説型から、児童生徒が自ら調べ考えることができる副読本とすることが重要である。こうしたことから、「宇治学」副読本の編集方針を次のようにした。

- ① 「ふるさと宇治」の状況や特徴、良さや課題について知り、より良い宇治の姿や将来の自分、自らの生き方について主体的に考え行動する児童生徒を育成するための副読本とする。
- ② 問題の解決や探究的な学習を通して、主体的、創造的、協同的に学習に取り組む児童生徒を育成するための副読本とする。
- ③ 児童生徒一人一人の主体的な探究活動を支援し、自ら考え、表現する力を育てるために学び方を学べる副読本とする。
- ④ 探究的な学習の学習過程（「課題設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」）のそれぞれの段階で、児童生徒が見通しをもって主体的に学習できるような構成の副読本とする。

副読本を使って効果的に指導できるように、教師用指導資料集と児童・生徒用ワークシートも併せて作成することとした。教師用指導資料集は、授業展開例や授業計画のアイデアとともに、教員がより良く宇治を理解できるように必要な資料を記載する。また児童・生徒の学習支援に必要な人材や情報の収集先、事業所や機関、体験学習受け入れ先等を一覧表にして記載するなど、すべての学校・教員が、宇治市の人的物的資源を十分に活用できるように工夫する。

（橋本祥夫・辻弘一）

3 研究仮説

「宇治学」の副読本の特徴は以下の3点である。

- ① 宇治市の小中一貫教育における重要な学習資料であること
- ② 教師用指導資料集、ワークシートと一体化した総合的な学習の副読本であること
- ③ 学び方を重視した地域探究型学習のモデルプランであること

①については、改正学校教育法が成立し、平成28年度から小中一貫教育を実施する「義務教育学校」が創設されることになり、市区町村教育委員会などの判断で、既存の小中学校などを義務教育学校にできるようになる。小中一貫教育は、これまでも全国の自治体で推進されてきたが、これを機会に全国の小中一貫教育は一層促進されると予想される¹。

宇治市においても、平成24年4月からすべての市立小・中学校で小中一貫教育を全面实施し、取り組みを進めている。

宇治市教育委員会が実施した「平成26年度宇治市小中一貫教育についてのアンケート報告書」²によれば、小中一貫教育で進めている「系統的・継続的学習指導」について一定の評価があり³、その一層の推進が期待されている一方、「地域に根ざした教育活動」は決して十分とは言えない⁴という実態がある。

したがって、総合的な学習「宇治学」を小中一貫教育の1つの柱に据え、「系統的・継続的学習指導」による「地域に根ざした教育活動」を実施することは、宇治市の教育の現状を踏まえると必要なことである。「宇治学」の副読本の作成にあたり、小学3年生から中学3年生までの指導計画を見直している。各学年の発達段階、系統性を意識して作成する「宇治学」の指導計画は、小中一貫教育の重要なツールとなる。これは、全国でも大変珍しい試みであり、今後、全国各地で小中一貫教育のカリキュラム、学習プログラムが検討される中で、「宇治学」の取組は、総合的な学習の一つのモデルケースとなるだろう。

②については、総合的な学習の副読本は全国でも例がない。それは、総合的な学習が教科書に準じるような副読本を使って学習することは好ましくないと考えられているからである。

総合的な学習の目標は、以下の5つの要素か

ら構成されている⁵。

- ・横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して
- ・自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成すること
- ・学び方やものの考え方を身に付けること
- ・問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育てること
- ・自己の生き方を考えることができるようにすること

この総合的な学習の目標の構成について十分に理解し、各学校において定める目標及び内容に反映させ、創意工夫して実践していくことが求められる。このため、教育行政が一律に内容を固定化することは好ましくなく、内容を示すものとしての副読本の作成はこの目標になじまないと考えられてきた。しかし、一方では、総合的な学習が目標に示されているような探究学習となっていないという実態や、先に述べたように指導計画の作成や実施について各学校・教員に相当の負担となっている実態がある⁶。

総合的な学習の本来の目標を達成しつつ、各学校、教員の負担を軽減するためには、各学校任せではなく、総合的な学習の基本モデルを提示することが求められる。そのために、宇治市では、各学校で実施する総合的な学習の約半分の時間を副読本を活用して指導することとし、副読本だけでなく、それを効果的に活用するために教師用指導資料集とワークシートも併せて作成することになっている。

全国では、自由度の高い総合的な学習の枠組みでは、各学校が効果的な学習ができないという判断から、新教科として取り組んでいる自治体もある⁷中、宇治市の取組は、各学校の特色を活かした総合的な学習を維持しながら、全市で身に付けたい力を明確にし、学習効果の高い総合的な学習を実施するために副読本の作成に取り掛かった。宇治市が作成する総合的な学習の副読本は、総合的な学習の特徴的な取り組みの一つとなるだろう。

③については、各自治体において、総合的な学習で活用する地域学習の資料集としての副読

本を作成しているケースはある⁸。資料集なので、どのように使うのかは各学校に任されている。内容としては、その地域の地理・歴史・文化・産業などを網羅的に取り上げ、知識・理解的な読み物教材となっている。「宇治学」が目指しているのは、そうした知識・理解的な読み物教材としての資料集ではなく、主体的、創造的、協同的に学習に取り組む児童・生徒を育成するための副読本である。したがって、「〇〇学」という名称から、知識理解的な内容を想起しやすいが、どのようにして学ぶのかという、学び方を重視しているところが、従来の地域学習に使用する副読本とは異なるところである。「宇治学」は、新しい地域学習のモデルを示すものとなるだろう。

以上から、研究仮説を以下のように設定する。

地域探究型学習のモデルプランとなる「宇治学」の副読本（教師用指導資料集、ワークシートを含む）の作成と使用により、

- ① 児童・生徒にとって、学び方のアプローチとなり、横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自己の生き方を考えることができるようになること
- ② 指導者にとって、「宇治学」の指導ノウハウを伝えることで授業支援となり、若手教員や他地域出身者にもすぐに取り組めるようになること
- ③ 地域社会にとって、児童・生徒が宇治に関心を持ちふるさと意識を持つことによって刺激が生まれ、主体的にまちづくりに参画する生き方につながるようになることが期待できる。
(橋本祥夫・市橋公也)

4 研究計画

宇治市教員委員会では、「宇治学」推進事業として、以下の3事業を行っている。

- ① 各学年で共通して学ぶ重点単元の設定
- ② 「宇治学」副読本の作成と配付
- ③ 小学校の宇治茶学習への支援

宇治市教育研究会「宇治学」部会において、学年の重点単元の検討及び単元構想・単元計画等の検討を行う。「宇治学」部会は、教頭1名（部

長)、小学校の教員3名、中学校の教員2名、指導主事2名で構成される。京都文教大学の教員が1名、スーパーバイザーとして参加する。平成26年度は、第3学年と第6学年、平成27年度は第4学年と第7学年、平成28年度は第5学年、第8学年、第9学年の重点単元の内容を検討する予定である。

重点単元題材・テーマ案(表1)

学年	重点単元の題材・テーマ	内 容
第3学年	宇治茶	宇治茶生産と茶文化
第4学年	宇治の環境	宇治の自然環境、生活環境
第5学年	住みよいまちづくり	地域福祉・ノーマライゼーション社会
第6学年	ふるさと宇治の魅力	宇治の歴史・文化・自然
第7学年 (中1)	防災宇治	防災(減災)と災害後の活動
第8学年 (中2)	キャリア教育	地域の産業、職場体験学習
第9学年 (中3)	よりよい宇治へ	将来の宇治市への提言

(一貫教育課 教育振興係作成のものに筆者加筆)

本「宇治学」部会で示された単元構想・単元計画に基づき、「宇治学」副読本編集委員会が副読本の作成に当たる。「宇治学」副読本編集委員会は、校長会の代表が委員長を務める。

各学年部会は、教頭1名、教員2名、「宇治学」研究員1名、指導主事2名の計6名で構成されている。各学年部会にも、京都文教大学の教員が1名、スーパーバイザーとして参加する。編集委員会及び学年部会は、年間6、7回程度開催を予定している。

「宇治学」副読本は、小学校3年生から中学校3年生まで7種類作成し、それと関連して、同教師用指導資料と印刷用児童・生徒ワークシートデータを作成する。

また、「宇治茶の普及とおもてなしの心の醸成に関する条約」(2014年10月21日制定)の趣旨を踏まえ、宇治で育ち宇治の将来を担う児童・生徒に宇治茶とおもてなしの心を培う学習が進められるよう、各小学校に抹茶碗・抹茶等を「宇治茶スタートセット」として配付する。配付学年は、「宇治学」学習での活用を想定し、小学校第3学年としている。(橋本祥夫・辻弘一)

5 総合的な学習の副読本の先行事例

教科ではなく、地域や児童・生徒の実態に合わせて計画される総合的な学習において、副読本の作成はあまり行われていない。その中でも、総合的な学習に活用し、しかも地域学習の副読本を作成している事例がいくつかある。本章では、そのような事例を検証し、本研究においてどのような副読本を作成することができるのか、その可能性を探りたい。

「宇治学」副読本作成スケジュール案(表2)

期・学年	第1期	第2期		第3期	
	3・6年生版	4年生版	7年生版	5年生版	8・9年生版
平成26年度	京都文教大学との連携による編集方針の検討 3・6年の単元指導計画、学習指導案の作成				
平成27年度	検討・取材・編集	4・7年の単元指導計画、学習指導案の作成			
平成28年度	取材・編集 印刷製本・完成納品	検討・取材・編集		5・8・9年の単元指導計画、学習指導案の作成	
平成29年度	使用開始	取材・編集 印刷製本・完成納品		検討・取材・編集	
平成30年度		使用開始		取材・編集 印刷製本・完成納品	

(出典：平成27年度第1回「宇治学」副読本編集委員会資料)

先行事例の副読本は、(1) 教科書型、(2) モデルプラン型、(3) 資料集型に分類できる。

(1) 教科書型

教科書型は、教科ではない総合的な学習を新教科として設定し、教科書として作成している例である。事例としては、青森県三戸町の「立志科」がある。

三戸町では、独自の小中一貫教育要領を作成し、小中一貫教育を推進している。「立志科」とは、ふるさとに誇りを持ち、三戸町の次代を担う児童・生徒の育成をねらいとして、道徳、特別活動、総合的な学習を融合した三戸町独自の新教科である。小中一貫9年間の学びを通して、道徳、特別活動、総合的な学習のねらいを達成するとともに、キャリア教育・防災教育・ふるさと学習などの今日的な教育課題も取り入れて指導できるように編成している。

「立志科」は、新教科なので、独自の教科書、指導書を作成している。教科書は、1、2年、3、4年、5、6、7年、8、9年に4分冊し、児童・生徒の発達の段階に応じて10能力を系統立てて身につけさせることとしている⁹。

「立志科」では、「ふるさと創造に関する領域」という観点があり、地域文化の理解を通して、地域の伝統や文化を守り、伝承していく力や豊かな教養を養うことを目指している。「立志科」を通して、地域のことを知り、その良さをこれからどのように生かし、自分が関わっていくのかを考え、自分の未来、町の未来に希望を持つ子どもを育てようとしている。そのために、学校と教育委員会が一体となって取り組んでいる。

(2) モデルプラン型

モデルプラン型は、総合的な学習のモデルプランを提示した副読本である。総合的な学習では、国際理解、情報、環境、福祉・健康、地域の人々の暮らし、伝統と文化などが学習活動の事例として挙げられている。それぞれの分野に関係する団体が副読本を作成し、各学校に提供している場合がある。

例えば、京都府土地改良事業団体連合会と京都府森林組合連合会が発行している「知りたいな 京の森と水土里^{みどり}」(平成22年3月)は、環境学習に使える副読本として作成している。発行

者の意図としては、農地の整備や森林保護の理解をねらっている。副読本に対応した「指導の手引き」があり、指導案例と参考資料が載っている。

このように総合的な学習に取り入れてもらおうと、各種団体がモデルプランを示した副読本を学校現場に多数提供している。

モデルプラン型の特徴は、副読本と合わせて、指導書や指導資料を合わせて作成していることである。ワークシートを作成している場合もある。これらの教師用の手引きや資料を作成することにより、学校で活用してもらうことを期待している。

地域学習で活用するモデルプラン型の副読本としては、千葉県が作成した「ちば・ふるさとの学び」(平成21年3月)がある。平成21年に完成し、県内の小学校各1冊、中学校各6冊、公立高等学校各1冊、私立小中高各1冊を配付している。

副読本は、「生物多様性」「歴史・文化・伝統」「食文化・健康・食育」「防災・安全・安心」「夢・仕事」のテーマごとに、千葉県の「人」「もの」など、「ちばらしさ」を伝える内容を、それぞれ本文・課題・資料によって学習する。

副読本の特徴は以下の4点である¹⁰。

- ① 教科、総合的な学習、特別活動等、各学校の教育活動の実態に応じた柔軟な活用が可能
- ② 本文、課題学習に対応した最新資料に触れることで、発展的な学習展開も可能
- ③ 様々な学習機会に対応できるようにコンパクトな内容とビジュアルで分かりやすい紙面構成
- ④ 指導資料の資料解説、指導展開例などを活用することにより、充実した指導が可能

指導資料では、テーマごとに、課題の例示とそれの調べ方、指導展開例が示されている。

また、川崎市では、まちと関わるきっかけとして、まちづくりを遊び感覚で楽しく学べるようなまちづくり副読本「まちは友だち!」を小学校の先生と市のまちづくり局の職員が共同で作成しており、毎年、市内の小学校3年生に配付している。

まち探検や遊び場今昔マップづくり、まちづ

くりゲームなど、遊び感覚でまちづくりを学習しながら、自ら学び考える力、地域やまちづくりの関心を育てることをねらいとしている。主に総合的な学習を想定した活用事例を作成している。また、市の職員による出前授業も行っている。

(3) 資料集型

資料集型は、地域学習の資料集として各自治体で作成しているものである。地域学習の資料なので、総合的な学習だけでなく、社会科や道徳、特別活動など幅広い分野での地域学習を想定して作成されていることが多い。

地域学習の資料集の事例としては、青森県東通村の「東通科」の副読本がある。東通村では、地域を核にした小中一貫の総合的な学習のカリキュラムとして、「東通科」が設置されている。「東通科」の特色あるカリキュラムとして、「東通学」を置いている。「東通学」の中には、各教科、領域、教育家庭外の活動との関連を考慮した総合教科として「東通科」を中心カリキュラムとして設定している。

「東通科」の教師の指導の際の参考手引きとして資料集を作成している。「東通科」では、地域素材を中心に、子どもたちが課題意識を持ちながら、個人あるいはグループで探究的な学習を行い、様々な知識・技能を習得し駆使しながら、多面的な物の見方・考え方を養うことをねらいとしている。

「東通科」は総合的な学習の年間配当時間から35時間程度を割り当てて実施している。「東通科」では、系統性を持たせた年間計画を立て、各学年において「学年別テーマ追究学習」を計画するために、地域の自然、文化、人間などのテーマをそれぞれ設定している。

また、資料集型の副読本として、久留米市が作成している「くるめ学副読本」がある。「くるめ学」はふるさと久留米市に誇りと愛着を持ってほしいと考えた学習である。この副読本も総合的な学習だけでなく、道徳など様々な学習での活用を考えている。

副読本の構成は、初級編、中級編、上級編に分かれており、小学校3、4年生は主に初級編、5、6年生は主に中級編、中学生は上級編を使うこ

とを想定している。

川崎市では、「かわさき」という副読本を作成している。小学校3、4年生の社会科では、地域学習をするため、どの自治体でも3、4年生の社会科で使用する副読本を作成している。「かわさき」は、3、4年生だけでなく、6年生まで使える地域学習の副読本として作成されている。社会科の他、総合的な学習や自由研究などでも使うことを想定しており、授業だけでなく、自由に使える資料集として作成している。

八代市では、低学年のうちから郷土八代の理解を深めようと「やつしろ 行ってみマップ」という冊子を作成している。本冊子では、八代の名所、旧跡、公園、施設等を現地に行きながら、写真や地図で紹介している。例えば、「公園へ出かけよう」という項目では、「水で遊べる」「家族で遊べる」などカテゴリーごとに紹介し、実際に家族で足を運びたいような工夫をしている。本冊子は、子どもだけでなく大人も一緒に使ってほしいという願いを込めて作成しており、家族で八代の様々な場所を探索する際のガイドブック的な位置づけをしている。

(4) 「宇治学」副読本の特徴

「宇治学」副読本は、(1) から (3) のどのパターンにも入らない新しい地域学習の副読本となる。

教科書型の特徴は、教科の教科書同様の扱い

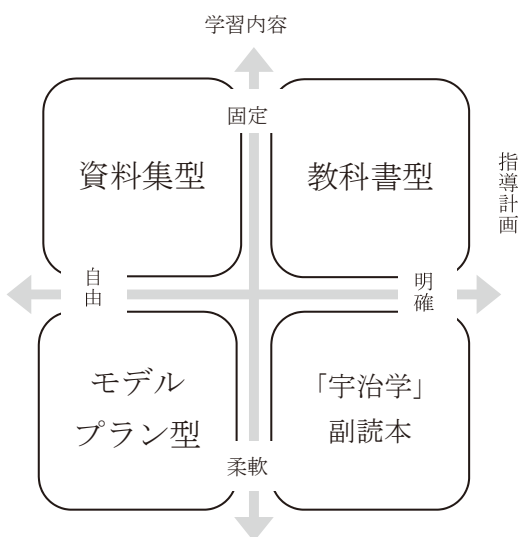


図1 副読本の類型（筆者作成）

なので、指導計画は明確で、学習内容も決まっている。「宇治学」副読本の場合は、あくまでも総合的な学習として行うので、教科書に近い扱いであるものの完全に教科書のように指導内容を固定することはしない。

モデルプラン型の特徴は、指導展開例が示されているが、あくまでも例示であり、各学校がそれを参考にして柔軟に指導すればいいことになっている。したがって、指導計画はあくまでもサンプルである。また、指導内容もどの学校でも使えるように柔軟に変えられるようになっている。「宇治学」副読本もどの学校でも使えるようなものを目指す、指導計画は明確に示す。「宇治学」副読本は、内容解説型の従来の地域学習とは違い、学び方を重視しているからである。探究型の学習過程を重視し、どのような学び方をするべきかを指導計画で示している。

資料集型の特徴は、あくまでも資料集であり、それをどのように使うかは各学校の判断に任されている。したがって、指導計画は各学校で独自に作成することになる。しかし、指導内容としては、学べき内容を網羅的に詳しく書いている。

「宇治学」副読本は、指導計画は明確に示すが、学習内容は柔軟であり、学校や地域の実態に合わせて柔軟に変えられるようになっており、資料集型とは対極にある。

副読本と合わせて、教師用指導資料集を作成し、「宇治学」として共通に学ばせたいことや指導スキルを教師用指導資料集に書くことで、柔軟な指導内容に留まらざるを得ない副読本を補うことができる。(橋本祥夫)

6 総合的な学習における地域学習の意義

平成20年3月学校学習指導要領が改訂され告示された。総合的な学習に関する改訂では、「第3指導計画の作成とその内容の取扱い」において、「地域の人々の暮らしと、伝統と文化などの地域や学校の特色に応じた課題」が加わったのは、児童の発達から考えてふさわしい課題であり、数多くの学校が実践を積み重ねているという全国の実態によるとされる¹¹。

地域の伝統文化や伝統芸能、地域の産物を生

かした特産品や工芸品、歴史や民話など、学校を取り巻く地域には多くの優れた素材が存在している。これらの素材を生かした学習活動は、児童にとって具体的であり身近であるため、興味や関心をもちやすい。また、地域の人とのかわりも生み出しやすい¹²。

例えば、京都府宇治市には、世界遺産に登録された寺や神社があり、また、宇治市に伝わる伝統文化や伝統芸能、地域の産物を生かした特産品や工芸品、歴史や民話などが数多く存在する。児童・生徒がそれらに関心をもって、それらの歴史や由来などを調査したり、それらを支えておられる人々にかかわったりしながら、宇治市の伝統文化や伝統芸能、特産物や工芸品に対する思いや願いの聞き取り調査を進めていくことができよう。

結果をまとめて発表するだけでなく、実際に足を運びそれらに直接触れながら納得や実感をし、自分たちが育つ地域のよさに気づき、地域への誇りと愛着を育み、これからの自分の生き方について考える機会となる。総合的な学習における地域学習の取組は、たいへん意義深いものと考えることができる。

今、宇治市の全ての小・中学校において総合的な学習を「宇治学」として取組を進めている。

総合的な学習で課題とされた学校間・学校段階間の取組の格差を改善することにもなる。小学校低学年の生活科において、人や社会及び自然を一体として身近な地域の素材を対象にした学習が小学校中学年以降の社会科や理科、総合的な学習において、義務教育9年間を見通した学習が展開されることとなる。郷土に愛着をもち、宇治市に育つことを誇りに思うとともに、自分の生き方に重ねながら常に自分自身に問いかける児童・生徒を育てることにもなろう。生活科からスタートした郷土学習が問題の解決や探究的活動を通した「宇治学」に発展・継承されることで、児童・生徒が主体的・創造的・協同的に取り組む態度が育つことにもなろう。9年間の一連の営みが、児童・生徒の自尊感情を一層高め、他者を思いやる精神を育てることにもなり、今後の取組の成果が期待できる。

(寺田博幸)

7 宇治市の将来にとっての「宇治学」の意義

(1) 目的

ここでは、学習テーマの設定内容が、今後の宇治を担う人材育成にいかにか重要であるかについて、とくに市が取り組む他の計画などとの関連性を中心に論じる。

また、学習手法として大学などでのアクティブラーニングの一環として取り組んでいるプロジェクト型学習が有する「宇治学」実践における可能性についてもふれ、今後の「宇治学」の内容や実践の方向性について考えてみたい。

(2) 多様な地域課題や行政計画との関連性

そもそも「宇治学」の取組の必要性は、学校現場においてだけ認識されたものではなかった。教育を取り巻く社会状況、宇治の地域の現状のなかで、今後の社会を担う人材育成を急務とみなす議論が、宇治市の今後のまちづくり・地域づくりを議論する場でもしばしば話題になってきた。筆者自身が参画する宇治市の行政計画関連の会議においても、地域の担い手育成＝「教育」は重要課題として強く認識されてきた。そういう意味でも、今回の「宇治学」の取組は宇治市の将来にとって非常に重大な局面であり、だからこその計画と有機的に結びつく形で計画実践されなければならない。ここではそれらの関連する計画をいくつか紹介しながら、宇治市にとっての「宇治学」事業の重要性を再確認したい。

①歴史と文化のまちづくり：愛着と誇り

宇治市が策定した『宇治市教育振興基本計画(H26～33)』では、今後宇治市が取り組む教育のビジョンを示しているが、そこでは教育理念として、「家庭・学校・社会でささえる宇治のひとづくり・まちづくり」があげられている。そして目指す人間像としては、宇治の自然、歴史、文化を守り育て「ふるさと宇治」をつくる人、地域や社会と協働し、世界に誇る「あすの宇治」をつくる人とされている。

まさにこのように地域に愛着と誇りをもちながら、世界に発信できる人材が、現在宇治市が推進している歴史まちづくりや観光振興の分野においても求められている。宇治の歴史・文化を継承し、さらにその価値を向上させ、未来に

つないでいくための文化庁、農水省、国交省所管の「歴史まちづくり法」に基づく法定計画である『宇治市歴史的風致維持向上計画(H24～33)』は、まちづくりのための総合政策であり、地域資源の発掘と価値付けやブランド化が不可欠となっている。宇治市の歴史文化を継承し、内外に守り伝えていくためには、それらの価値を理解する人材を育てていかなければならない。

さらに、「宇治茶に染める観光まちづくり・みんなで淹れるおもてなしの一服」と冠した『宇治市観光振興計画(H25～34、前期5年、後期5年)』においては、住民協働による観光振興＝観光まちづくりを基調とし、宇治市にとっての成長点である「観光」を、トータルなまちづくりのきっかけとすることをめざしている。さらに、宇治は世界遺産を有するグローバルな観光地であり、その価値を内外に発信すると共に、海外からの来訪者にホスピタリティをもって接することのできる人材が求められている。そのためには、地元宇治や日本はもちろんのこと、世界各地の文化・言語などを学ぶ、またそれ以前にそういった事柄に対する興味や関心を持てるような教育により、ローカルとグローバルの両方の感覚を有する「グローバル人材」を育てなければならない。これらの取組の基礎を築くのがまさに「宇治学」なのである。

②少子高齢化とコミュニティの衰退

他の地域と同様に、宇治市の地方創生にとって、人口減少と少子高齢化が深刻な状況である。さらにそれに伴って、地域でのコミュニティ活動に様々な課題が生じている。町内会・自治会の加入率が低下し、役員の負担感が大きく、役員のなり手不足に陥っている町内会・自治会もあるという。共働き家庭が増加するなどライフスタイルの変化などもあり、様々な工夫が必要となっている。

『コミュニティ活性化推進検討委員会提言(H27年3月)』では、上記のような具体的な課題に加えて、「子どもの頃からの地域との関わりが重要」であり、「地域の一員としての自覚と経験」を持てる機会を創出し、次世代のコミュニティ活動の担い手育成をすることが不可欠であるという認識が示されている。「宇治学」の内

容にこのようなシチズンシップ教育的な要素を盛り込むことができれば、市民活動やコミュニティ活動の担い手を少しでも育てることができるかもしれない。

(3) プロジェクト型学習 (PBL) による取り組み推進

複雑で変化のスピードの速い社会において、それらの社会変化にも対応しながら、課題を発見し、それらの解決に向けて、自ら主体的に行動できる人材の育成がますます重要になっている。そのような能力を育成する教育方法として、注目されているのがプロジェクト型学習 (PBL: Project Based Learning) である。

①大学でのPBL

プロジェクト型学習 (PBL: Project Based Learning) とは、特定の課題について一定期間チームで取組み、課題についての解決を提示する主体的な学び (学び合い) をさしている。京都文教大学では、共通科目の現場実践科目群に、選択必修科目の一つとして、「プロジェクト科目」を設置している。

テーマ設定は多様であるが、その志向性に応じて、「プロジェクト科目 (テーマ)」、「プロジェクト科目 (地域)」と大別され、社会連携型 PBL、地域連携型 PBL として開講している。筆者も、これまで「宇治の観光まちづくり」「宇治茶」などをテーマに授業を担当し、学生たちが学習を通じて自ら発見した切り口を大切にしながら、地域でのイベント企画実施など、学生たちに実践を積み重ねてきている。このような「学ぶ」「伝える」「生み出す」プロセスが明確になった学習は、受講者の主体性を向上させ、満足度の高い内容となっている。

②保護者が学校に期待すること

平成25年5月に発表された『宇治市教育振興基本計画策定のためのアンケート調査集計報告書』によると、小・中学校の保護者は、以下のようなことを学校に期待している。まず、「各教科における基礎・基本の確実な定着」(61.5%)、さらに「発展的・応用的な学習の充実 (子どもたちの能力・適性、興味・関心に応じ、広げる・深める・進める学習)」を望む保護者も半数以上いる (53.2%)。しかし大学などのアク

ティブラーニングなどで重視している、「課題解決的な学習の充実 (子どもたちが自ら課題を発見し、解決方法を考え、課題を追究しながら進める学習)」を望んでいる保護者は、43.7%にとどまっている。

また、「表現力やコミュニケーション力を身につける教育の充実 (54.7%)」、「地域との連携や地域の多様な人材の活用 (58.4%)」を希望している。

さらに、家庭、学校、地域の役割分担を尋ねた問いでは、小学生保護者も中学生保護者も、「生まれ育った地域を愛する心を育てる」のは、主に家庭 (47.1%、41.6%) だが、それを補うのは学校 (31%、29.2%) と考えている。「自発的に行動する意欲を育てる」については、小学校の保護者では、家庭49.8%で、学校44.4%で同じくらいだが、中学校保護者は学校54.1%、家庭39.7%で、学校に期待する割合が高くなってきているのが特徴的であった。

以上のように、保護者は「学力」定着を希望している。もちろんそれは当然の期待ではあるが、これからの時代で伸びていく力を育てるために、保護者が求める以上に学校は先見的に、社会が必要とする、あるいはこれからの時代を生き抜くための子ども達自身が考え行動できる能力を身につける、あるいはそのような方向性への動機付けを可能とする学習方法を提案していかねばならない。地域の課題を発見し自分のふるさとへの愛着を深めるには、家庭、学校、地域の連携が必要とされる。そのためにまず学校教育から「宇治学」を始め、子どもを中心に据えながら、家庭や地域を繋いでいく、そのような役割を学校教育が果たせるとしたら宇治の教育の未来に大きな一歩となるはずである。

(4) 「宇治学」実践にむけた体制構築の必要性

今後の「宇治学」副読本の制作、それらを用いた授業実践についてどのようなサポート体制を構築できるかが重要になる。

そのためには、教員個人の努力や工夫を、教員個人のもののままにとどめるのではなく、学校単位、また学校をどう超えて共有する仕組みを作れるかが重要になってくるだろう。また、コミュニティ活動調査でも明らかになったのは、

宇治市内の地域ごとの多様性である。これを学校教育の文脈で置き換えると、学区ごとの多様性ということになるかもしれない。教員にとっても、子どもたちにとっても、宇治市内の内部に存在する地域多様性に触れるため、学区ごとの個性を活かしながらも、共有・交流する仕組みが必要となるであろう。

最後に、副読本作成という大事業の達成時には、内容修正が必要なほど時代が先行してしまうことが出てくるかもしれない。それほど現代は不確定かつめまぐるしいスピードで変化している。そのような変更にもすぐに対応できるような教材の形態上の工夫を凝らすことも副読本が実際に使用される副読本になるための重要な条件といえる。宇治の歴史が様々な変遷を遂げつつも重層的に蓄積してきたように、「宇治学」の内容も時代に応じて、あるいは時代の先を展望して、柔軟に対応できることができれば、次世代に残る取組になっていけるはずである。

(森正美)

8 「宇治学」フィールドワーク研修

(1) 研修講座の概要

「宇治学」にかぎらず、地域に根ざした教育活動を実践し、児童・生徒が自ら調べ考える力を育てるうえで、フィールドワークという手法は大きな可能性を秘めている。しかし、教職科目の中にフィールドワークが位置づけられているわけではないため、フィールドワークに関する教育を受けないまま教職につく教員も多い。

ただ、フィールドワークは一部の特殊な教育を受けた専門家にしか実践できないものではない。現場で経験を積み、コツを身につければ、だれでもが実践できる、ひらかれた探求の手法である。

このひらかれた探求手法としてのフィールドワークの意義を理解し、「宇治学」を実践するための指導力を身につける機会として、宇治市の教員を対象に、フィールドワーク研修講座を実施した。実施にあたっては、宇治市教育委員会と宇治市生涯学習センター主催とし、ひろく宇治市内の市立小学校、中学校教員に参加を呼びかけた。「すぐに活かせるフィールドワーク

のアイデアとポイント」と題し、講師は鵜飼正樹がつとめた。

研修講座の開催日時は2015年8月3日（月）の午前9時から12時、会場は宇治市広野町の宇治市立大久保小学校ランチルームであった。会場となった大久保小学校は、宇治市の中心部から2〜3キロ離れたところに立地する、児童数900名余りの小学校で、宇治といえばまず名のあがる平等院や宇治茶のような有名な観光資源は校区の外にある。しかし、だからこそ「あるものさがし」という視点でフィールドワークをすることで、校区の宝を教員自身の手で見つけてほしいという期待を込めた。

当日の参加者は28名（申し込みは30名）。内訳は小学校教員25名、中学校教員3名であった。

(2) 研修講座の内容

講座は以下のような内容で構成した。内容は、京都文教大学人間学部文化人類学科（当時）で2008年から2012年まで「フィールドワーク入門」として1回生向けに開講していた授業科目をベースにしたものである。

①班分け

原則3名でひとつの班とし、研修開始時から大きな机（④の発表準備作業で使用する）に班別に着席してもらった。当初の参加予定者は30名だったので10班を予定していたが、欠席者が2名あり、4名の班を1つつくことにして、全部で9班とした。

②講義（9時10分〜9時40分）

レジュメ（資料1）と写真を中心としたパワーポイントを用意し、総合的な学習におけるフィールドワークの意義、フィールドワーク指導のコツ、フィールドワーク授業の進め方、フィールドワークのテーマ例などについて、講義した。パワーポイント資料はこの報告に添付していないが、マンホールのふたや古絵葉書などを題材に、フィールドワークを「みる」→「あつめる」→「ならべる」という3段階のプロセスとして整理し、それぞれの段階でどのような気づき・発見があるかをわかりやすく理解できる内容とした。

フィールドワークでは、児童・生徒が教員の思いもかけないような発見をする可能性がある、

資料1 宇治学フィールドワーク レジューメ

すぐに活かせるフィールドワークのアイデアとポイント
京都文教大学総合社会学部 橋岡正樹

フィールドワークと公立小・中学校の教育をつなぐヒント
「たんけん・はっけん・ほっとけん」(井阪尚司)
みぞっこ探検→水を利用するくらしと文化の発見→地域づくり
校区を探検し、発見した課題の解決策を、児童・生徒みずから考える
地元学(吉本哲郎)
地元を調べ、地元に学び、地元の力を引き出す
「ないものねだり」から「あるものさがし」へ
トコロジスト(高口哲一)
その「場所」の専門家
先生自身が校区のトコロジストになる

フィールドワークをむずかしく考えない
Field workを英和辞典などで引くと
(測量・地質学などの) 野外作業、(生物学などの) 野外採集、(人類学・言語学・社会学などの) 現場訪問、実地研究、フィールドワーク『ジェニウス英和辞典』
つまり、野外での作業はすべて「フィールドワーク」
社会科学だけではなく
国語(祖父母の語学調査)、理科(とくに生物、地学)

フィールドワーク指導のちょっとしたコツ
フィールドワークには正解がない
正解はないが、いいフィールドワークはある
現場でしか出会えないものごとに驚き、それをきっかけに問いが深まっていく
よくできる子が、いいフィールドワークをするわけではない
ものすごい発見をする子どもがあらわれる可能性
事実と驚く
教員も、児童・生徒とともに、発見を一緒にしようがることが大切
考えるすじ道としての、つなぐ、かさねる、はぐ
発見を単発で終わらせないために、関連づける→さらなる発見へ
つなぐ 今と昔をつなぐ、物件Aと物件Bをつなぐ、水の流れをつなぐ

1

かさねる 時間を重ねる、地形と建物を重ねる
はぐ 下からあらわれる、現在の中にひそむ過去を見つける
まとめの方向性としての、リスト、地図、こよみ
作品としてまとめるさいの到達点イメージ
リスト:目録、一覧表
○○地区の昔の遊び、理科教室にある備品、公園の植物の種類
地図:分布、広がり
○○の分布、○○マップ
こよみ:時間による変化
○○地区の1年の暮らし、○○家の1日、○○年表、○○ができるまで

フィールドワーク授業の進め方(フィールドとザスクの位置)
あるく→みる・きく→あつめる→ならべる→えがく→つたえる→かたりあう、という一連の流れ
前半は現場に出て発見する(フィールドワーク)
後半は教室でさらなる発見とプレゼン(デスクワーク)
最後にもう一度現場でシェア(フィールドワーク)

あるく・みる
歩き回って、もの、ひと、ことを発見する
写真撮影
発見したもの、ひと、ことを写真に撮る
みる・きく
発見したものについて、地元の人に質問する
「これは何ですか?」「何と呼んでいますか?」「何に使いますか?」
写真ごとにカードをつくる
写真を貼る
説明をつける
地元の人の言葉を生かす
タイトルをつける
カードを分類する
K)法的に

絵地図、一覧表、パワーポイントなどでまとめる

2

横道紙にサインペン、ポストイットで充分
発表して、かたりあう
クラス発表
さらに、地元の人もまじえて、発表する
まとめた絵地図などを校区に配布する

フィールドワークのテーマ例
あるものさがしという視点でみれば、校区は宝の山

校区風景10選をつくる
景色のいいところ探し
校区一を探そう!
校区一古い建物、大きな木、最高齢者など
生きもの地図をつくろう
タンポポ、カエルの鳴き声、セミの抜け殻、秋の虫の声
都市部の学校でも、意外に種類は多い
水の流れ、流域をたどる
校区を流れる川を河川から源流までたどる
歴建物
川岸や海岸に流れ着くものを集める
現代文化と環境問題を考えるきっかけに
通学路きけんマップ
おじいさん、おばあさんに聞く
先輩に聞く
名人(職人)に聞く
インタビューによって、歴史にせまる
個人の歴史と地域の歴史をかきねる
卒業アルバム、卒業文集、学校通信などから見る学校風景の変化
校区の古い写真や地図
目に見えるものから、歴史にせまる
昭和を探そう!
校内の重要文化財を探そう!
校内の「私の好きな場所」

3

地図から見える不思議なたちや地名の謎
時刻表と駅の乗降客調べ
他校と相互に学校探検一他校紹介一他校生の目に見える母校を知る

公立小・中学校教育におけるフィールドワークの意識
現場に出なければ、出会えない、わからないものがあることを実感する
ネット調べればすべてわかるわけではない
地域の特徴・個性を理解し、調べたことを生かす
問題解決型学習への接続可能性
聞き上手を育てる(話し上手ではなく)
年齢の離れた人の話を聞く経験
足元を見つける(見直す)技法として
地元が日本や世界、過去や未来とつながったものであることを理解する
「ただの風景」「ただの町」「ただの人」「ただの家」の貴重さに気づく
地元を大切に思える子に
子ども一人一人に、その子にしかできないフィールドワークがある
先生の発見できないことを、子どもが発見する

参考文献
井阪尚司・蓮生野孝規編著『たんけん・はっけん・ほっとけん』昭和堂、2001
福田由紀『トコロジスト 自然観察からはじまる「場所の専門家」』日本野鳥の会、2014
高口哲一『放課後博物館へようこそ 地域と市民を結ぶ博物館』地人書館、2000
高口哲一『生きもの地図をつくろう』岩波ジュニア新書、2008
宮内参介『自分で調べろ技術 市民のための調査入門』岩波アクティブ新書、2004
吉本哲郎『地元学をはじめよう』岩波ジュニア新書、2008

4

教員も児童・生徒とともにその発見に驚き、おもしろがる姿勢が大切だ、「あるものさがし」という視点で校区に埋もれている宝をさがしてほしい、といった点を強調した。

③フィールドワーク（9時40分～10時30分）

班に分かれて大久保小学校周辺（小学校校内を含む）のフィールドワークを実践した。フィールドワークのテーマは自由とし、班で決めてもらった。事前に相談してテーマを決めてからフィールドワークに向かった班もあれば、先に小学校周辺を見て回ってからテーマを決めた班もあった。

フィールドワークにあたっては、大久保小学校の校舎配置図、周辺の住宅地図、B4用紙（メモ用）、画板、デジタルカメラを使用した。

④発表準備作業（10時30分～11時30分）

フィールドワークで集めたデータをまとめ、発表のためのポスター作品制作と口頭発表の準備をした。ポスターは模造紙に手描きとし、色画用紙、サインペン、付箋紙、糊、はさみなどの文具も用意した。また、写真が印刷できるプリンターを用意し、フィールドワークで撮影した写真をその場で印刷して、模造紙に貼り込めるようにした。

⑤発表（11時30分～12時10分）

全部のポスター作品を会場に掲示し、それぞれのポスターを前に、各班の持ち時間3分で、フィールドワークの内容と結論について口頭発表してもらった。テーマと作品については後に紹介するが、どの班も、フィールドワークの着眼点、対象、まとめ方、発表の仕方に工夫が見られた。また、他の班の発表にも熱心に耳を傾け、作品を写真に撮る人も多かった。

⑥まとめ（12時10分～12時15分）

講座のまとめとして、鵜飼が簡単なコメントをした。ただ、発表に予定以上の時間を要したため、個別の作品については十分なコメントができなかった。

研修講座は以上のような内容であったが、初めて一緒になったメンバー（同じ市内の小中学校教員なので、もちろん相互に面識のある組み合わせもあっただろうが）が、フィールドワーク、発表準備、発表とプロセスを進めるうちに、

それぞれに手分けをしつつ、チームとして一体となり、積極的にテーマに取り組んでいった。短時間の講座ではあったが、フィールドワークのコツを十分に理解してもらえたという手ごたえを感じた。

③ フィールドワークのテーマ

発表のさい、模造紙作品にタイトルをつけてもらった。以下、そのタイトルと作品の内容について、簡単に紹介する。

①大久保小学校マンホールマップ

大久保小学校周辺の路上に存在するマンホール67枚を記録・観察し、用途を分類した。とくに多かった「仕切弁」が交差点付近に集中していることを発見し、その表面に書かれている番号や矢印の意味について考察した。

②広野町西地区バイパス計画をさぐる

工事中の立て看板を見かけたことをきっかけに、慢性的な交通渋滞解消のために計画されながら、なかなか進捗しない、大久保小学校周辺のバイパス道路計画について、その現状をさぐった。

③見えない川「三軒家川」をさぐる

かつて大久保小学校の脇を流れていた「三軒家川」の痕跡を探索した。不自然な坂道やすきまから暗渠となった川が存在を推測し、お年寄りへのインタビューで、昔の大久保小学校周辺の様子を明らかにした。

④お宅の表札は!?

大久保小学校周辺の民家の門構えと表札を記録・分類した。表札に関して、住人の姓名告知を目的とするもの、姓名告知より防犯が前面に出ているもの、門柱などのデザインに凝ったオリジナリティのあるものに分類した。

⑤クローズアップ大久保

大久保小学校周辺の店舗の現状を調べた。閉店となった文具店が多い一方で、整体・整骨院が増加しているという発見があった。また美容室も多く、それは住民の美意識の高さの現れではないかと推測した。

⑥住宅地の中のオアシス

大久保小学校の脇を流れる名木川沿いに、ひと息つけるような自然をさがして歩いた。8月はじめという夏の盛りにまだあじさいの花が

残っている一方で、どんぐりや柿の実がみのりはじめ、移ろいゆく季節を感じるフィールドワークになった。

⑦太陽光発電ってなに？

大久保小学校校舎内に設置されている太陽電池パネルを対象に、素材、向き、発電能力などについて調べた。太陽光で発電した電気は蛍光灯に使われており、この日の発電量は蛍光灯84本分にあたるということなどがわかった。

⑧そうだ!! 金比羅祭について調べよう!

大久保小学校の近くにある神社と寺院について調べた。200年前の灯籠が残っていることや、神仏分離によって神社と寺が分かれたこと、寺院の境内をJRが横切って走っていることなどを発見した。

⑨ MARK DE MAP

大久保小学校校舎内の教室等を示すマークを集めた。トイレのマークが子供用と大人用で大きさが違う、職員室のマークがワンピースの女性とネクタイの男性で示されているのはなぜか、校長室にはなぜマークがないのかなどの発見や疑問が出された。

(4) 研修講座の評価

時間が限られていたうえに、講師の能力不足もあり、終盤は駆け足になってしまった点が、今回の研修講座の大きな反省点であるが、講師として感じたこと、気がついたことを以下に整理しておく。

まず、全体の雰囲気から、フィールドワークは特殊な学問研究の手法ではなく、だれもが自ら調べ考えるために実践できる、ひらかれた探求の手法であることについては、十分に理解してもらえたと感じた。

また、フィールドワークのおもしろさ、楽しさについても、かなり伝えられたと思う。それも、現場に出て、さまざまな発見をするおもしろさ、楽しさだけでなく、最後に短時間でも全部の班が発表することで、それぞれの視点の違いとテーマのおもしろさを共有できるということまで伝えられたことは大きな収穫である。

次に、時間不足ではあったが、短時間に集中して、フィールドワークからまとめ、発表までを一連の作業として経験することで、効率的に

フィールドワークのコツを身につけてもらうこともできたと思う。3時間でひとりのフィールドワークを指導が可能だということを知ってもらえれば、教育現場で生かしてもらえる可能性は高まるだろう。

それから、3名ないし4名という小集団の共同作業として取り組んだことで、チームによるフィールドワークが生む教育効果にも気づいてもらえたのではないだろうか。

また、結果としてテーマの重なりがなかったことも収穫だった。テーマが重なること自体が悪いわけではないが、校内を含む小学校周辺を50分以内でフィールドワークするという条件でも、テーマが重ならなかったことから、同じところを歩いても、人によって、班によって、ちがうものが見えるということを実感してもらえたのではないか。

さらに、有名な観光地ではなくとも、校区にはフィールドワークの対象として興味を引くものがたくさんあることを、実感してもらえたことも重要である。それぞれの教員が自分の学校で「宇治学」を実践するさいにも、平等院や宇治茶といった、いかにも宇治的なテーマ以外にも、その学区の地域に根ざしたさまざまな可能性がある。フィールドワークは、そうした可能性＝校区に埋もれている資源を発見する手法のひとつでもある。

特筆すべきは、参加者の意欲と能力の高さである。「宇治学」という新しい地域学習を推進していくうえで、宇治市の教員は十分な資質を備えていることを、あらためて認識した。「宇治学」の今後に大いに期待が持てる。

ただし、以上については、研修講座に関心を持って参加した、意欲のある、そしてもともと一定水準以上の能力のある教員を対象とするものだったという点を、割り引いて考える必要があるだろう。参加者は、講師が指示を出す前にどんどん動き、てきぱきと進めていった。しかし、関心や能力にばらつきのある児童・生徒に、選択できない授業として、教室でいっせいに教えるさいには、もっと工夫が必要である。

受講者が提出した報告書を見るかぎり、この研修講座にはおおむね満足してもらえたようで

ある。以下は、報告書のアンケートに対する回答である。

「今回の研修講座は、教職員としての資質向上に役立ちましたか？」という質問には、「大いに役立った」が66・7%、「役だった」が33・3%（「あまり役立たなかった」「役立たなかった」という選択肢もあったが、いずれも0%）。

「今回の研修講座は、満足の内容でしたか？」という質問には、「大いに満足した」が48・1%、「満足した」が51・9%（「あまり満足しなかった」「満足しなかった」という選択肢もあったが、いずれも0%）。

「今回の研修講座は、学校（園）で広めたいと思うものでしたか？」という質問には、「ぜひ広めたい」が48・1%、「広めたい」が51・9%（「あまり広めたいと思わない」「広めたいと思わない」という選択肢もあったが、いずれも0%）。

自由回答の感想・意見欄にも「小さなとっかかりからたくさんの発見や気づきがあって、時間を忘れてついつい楽しんでしまいました」「教師自身が気づきや発見をすることにより、子どもたちに指導していくポイントがたくさん考えられて大変よかったと思います」「体験を通じて得られる気づき・発見が多いこと、それをグループで交流し構造化することの大切さを感じました」「気づきが子どもたちの課題となり、意欲的に学習を進めていく動機づけにつながっていくことがわかった」「文化財がなくても、いろいろとアイデア次第で学習できることがわかりました」「本校にはいつも何もないと思っていましたが、『あるものさがし』をして、地域を見直してみようと思います」など、好意的な記述が多かった（一部を改変）。

講師としては、今回の講座に参加された先生方が、それぞれの教育現場でフィールドワークを積極的に生かされることを期待している。あわせて、今回の内容をさらに充実させ、多くの教員に受講してもらえるフィールドワーク研修講座を考えていきたい。

最後に、研修講座の企画・準備から後片付けまでお骨折りいただいた宇治市教育委員会一貫教育課の山花啓伸先生、会場をご提供いただいた大久保小学校校長の松居博之先生、同教頭の

田中多賀子先生、そして猛暑の中、熱心にフィールドワークに取り組み、素晴らしい作品を仕上げられた参加者の先生方に、あらためてお礼を申し上げたい。（鶴飼正樹）

9 「宇治学」単元構想

(1) 「宇治学」の目標と育てたい力

「宇治学」の目標は、「地域社会の一員としての自覚を持ち、ふるさと宇治をよく知り、諸問題に目を向け、主体的、創造的、協同的に取り組むことで、よりよく問題を解決する資質や能力を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。」である（2章参照）。

その目標の下、「宇治で学ぶ」「宇治を学ぶ」「宇治のために学ぶ」学習として、発達段階に応じた目標設定をしている。

第3学年から第4学年までは、学びの基礎を身につけるために、「宇治を知り、宇治に親しむ」をテーマに「宇治学」を展開する。目標としては、次の3点である。

- ・校区及び宇治の良さを知り、宇治に親しむ。
- ・自然・風土、身近な商店の様子や産業、人々の営み、生活や環境問題等に関心を持つ。
- ・自分及び他者のことに関心を持ち、相互に理解しようとする。

第5学年から第7学年までは、自分の良さを知り、夢を広げるために、「宇治を学び、宇治を体験する」をテーマに「宇治学」を展開する。目標としては、次の2点である。

- ・宇治の歴史や文化に親しみ、宇治の特色や課題を分析し、よりよい宇治の姿を考える。
- ・地域の方々と積極的に関わり、地域社会の一員として自覚を持ち、自ら学び、自ら考え主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育む。

第8学年から第9学年までは、将来の自分を考え、志を持つために、「宇治の学習を深め、宇治からはばたく」をテーマに「宇治学」を展開する。目標としては、次の2点である。

- ・宇治を知り、課題を見付け、よりよく問題を解決する資質や能力を育む。
- ・地域社会の一員として自分の役割や行動について考え、問題の解決や探究活動に主体的、

創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考える。

評価の視点としては、「学習方法に関すること」「自分自身に関すること」「他者や社会とのかわりに関すること」でそれぞれの評価の観点を設定し評価する。

「学習方法に関すること」は、「課題発見・設定」「情報収集・分析」「思考判断」「表現・省察」の4観点。「自分自身に関すること」は、「意思決定」「計画実行」「自己理解」「将来・展望」の4観点。「他者や社会とのかわりに関すること」は、「他者理解」「共同・共生」「社会参画」の3観点である。（橋本祥夫・辻弘一）

(2) 第3学年における単元構想

第3学年では、単元名を「宇治茶のステキをつたえよう」と設定している。「宇治を知り、宇治に親しむ」をテーマに、宇治茶についての探究的な学びを通して、宇治茶の文化を伝える人々の営みや宇治の自然・風土について情報収集し、それらの情報を整理・分析しながら、宇治茶の魅力に迫っていくのである。

本単元を構成するにあたって、

- (1) 探究的な学びにするための学習過程の工夫
 - (2) 協同的な学びをつくるためのグループ交流の工夫
 - (3) 宇治茶に携わる方々とのかわりの工夫
 - (4) 考えたこと伝えたいことの発信の工夫
- の4つの視点を大切にしている。

視点(1)では、課題設定において、抹茶の体験やお茶摘みなどの直接体験から宇治茶について関心を高め、課題意識を醸成しながら宇治茶について主体的に探究し、宇治茶の魅力に迫っていくことを大切にしている。

そのポイントとして、以下の3点を重視している。

- ①課題意識を確かにする抹茶体験やお茶摘みなどの直接体験を重視すること
- ②課題追究における学習過程において、宇治茶に携わる方々との出会いを大切にすること
- ③グループごとに整理・分析した内容についてグループ間交流を行い、まとめた内容の改善を図るようにすること

視点(2)では、問題の追究過程における子どもの多面的な考えを共有するとともに、異なる視点から宇治茶について考えを深めるようにする。

協同的な学びを通して、互いの意見や考えを認め合いながら、さらに質の高い課題追究となるようにするため、必要に応じたグループ間の交流を行うようにする。

視点(3)では、専門家の方々にインタビューしたり、宇治茶の体験をしたりすることにより、学びの質を広げ深めることようにする。疑問に思ったこと、聞きたいことを直接専門家に聞くことは、宇治茶の知識を得るだけでなく、その専門家の思いや願いを聞く機会でもある。子どもたちが、宇治茶の魅力を支える専門家との出会いは、“ふるさと宇治”の意識を高めることにもなる。

視点(4)では、グループ間交流を通してさらに練り上げた宇治茶の魅力を「宇治茶のステキ」として情報発信をしていく。友達だけでなく、保護者や地域の方々に発信していく中で、そこから返される様々な声をもとに、新たな課題が紡ぎ出されていくのである。情報発信の双方向性を大切にしたい取組が、子どもの課題意識をさらに高めていくことになるのである。

課題設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現の学習過程を展開することで、子どもたちの目的意識、相手意識、内容意識、方法意識がより確かなものになっていくであろう。

(寺田博幸)

(3) 第6学年の単元構想

第6学年では、「ふるさと宇治の魅力 大発信」を重点単元テーマとして、単元の構想の検討が進んでいる。

平成26年度までの計画では、当初、「観光宇治」というテーマで宇治の歴史や史跡、伝統文化と観光を考える構成で議論が進展していた。これは、平成26年度に三室戸小学校5年生を対象に、同小学校の甲斐聖人教諭が中心に行った総合的な学習の実践「宇治市でおもてなし」の成果を基にしたものである。「宇治市でおもてなし」の授業では、宇治市で有名なものを調べ、宇治市

表3 「宇治学」の目標と育てたい力（改訂版） 「宇治学」部会作成

目標		地域社会の一員としての自覚を持ち、ふるさと宇治をよく知り、諸問題に目を向け、主体的、創造的、協同的に取り組むことで、よりよく問題を解決する資質や能力を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。			
目標と内容		1～2年	3～4年	5～7年	8～9年
地域社会の一員としての自覚を持ち、ふるさと宇治をよく知り、諸問題に目を向け、主体的、創造的、協同的に取り組むことで、よりよく問題を解決する資質や能力を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。		「宇治で学ぶ」「宇治を学ぶ」「宇治のために学ぶ」			
		宇治を知り、宇治に親しむ ＜学びの基礎を身に付ける＞	宇治を学び、宇治を体験する ＜自分の良さを知り、夢を広げる＞	宇治の学習を深め、宇治からはばたく ＜将来の自分を考え、志を持つ＞	地域社会の一員としての自覚を持ち、ふるさと宇治をよく知り、諸問題に目を向け、主体的、創造的、協同的に取り組むことで、よりよく問題を解決する資質や能力を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。
		○校区及び宇治の良さを知り、宇治に親しむ。 ○自然・風土、身近な商店の様子や産業、人々の営み、生活や環境問題等に関心を持つ。 ○自分及び他者のことに関心を持ち、相互に理解しようとする。	○宇治の歴史や文化に親しみ、宇治の特色や課題を分析し、よりよい宇治の姿を考える。 ○地域の方々や積極的にに関わり、地域社会の一員として自覚を持ち、自ら学び、自ら考え主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育む。	○宇治を知り、課題を見付け、よりよく問題を解決する資質や能力を育む。 ○地域社会の一員として自分の役割や行動について考え、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考える。	
学習方法に関する こと	課題発見・設定	身の回りや人、自然、ものに 関心を持ち、様々な気づき がある。	身の回りや地域の人、自然、も のに直接関わる中で、提示され たいくつかの課題から、自らの課 題を選ぶ。	身の回りや地域の人、自分を取り巻くもの、ことに対して抱いた 関心や疑問について、問題解決の方法や手順を考え、見直しを 持って計画を立てる。	もの、ことに対してより広い視野で関心を高めながら課題設定 し、仮説を立て、検証方法を考え、計画を立案する。問題解決 や探究活動に結びつけるためのさらなる課題を見つけて出す。
	情報収集・分析	その場に行き、見る、聴く、 触れる等の体験をとおして 情報を収集する。	話を聴く、質問をする、インタ ビューをする、メモをとる等、適 切な方法で情報を収集する。	自分を取り巻く環境から、情報手段そのものを自分で選び、情報 を収集したり、情報の取捨選択したりをする。	より広い範囲から、目的に応じた手段を選び、情報の取捨選 択、分類、整理を行う中で、視点を定めて分析する。
	思考判断	体験活動をおして心を動か され、思いや願いを持つ。	比較する、分類する、関連付け る、類推するといった方法で整 理、分析ができる。	事象の原因と結果を調べたり、統計的、多角的、科学的、総合的 等、様々な方法で考察する。	事象間の因果関係を推測したり、統計的、多角的、科学的、総 合的等、様々な方法で考察する。
	表現・省察	体験して思い、感じたことを 自分の言葉で表現する。 発表、絵、ポスター、紙芝 居、ペープサー(等)	調べたことを工夫して伝える。 パンフレット、リーフレット、年 表、新聞、寸劇、ロールプレイ 等)	○目的や意図、場面に応じて論理的に表現し、問題状況 における事実関係を把握し、自分の考えを持ちつらわたり やすく伝える。 プレゼンテーション、ディベート パネルディスカッション、ビデオレター(等) ○学習の仕方や進め方を振り返り、学習や生活に生かそ うとする。	○目的や意図、場面に応じて、分かりやすく論理的に伝 えたり、複雑な問題状況における事実関係を把握し自 分の考えを持つ。パワーポイント、プレゼンテーシ ョン、レポート、論文、ニュース番組、CM作り(等) ○学習の仕方や進め方を内省し、自ら判断し学習や生活 に生かそうとする。
自分自身に 関すること	意思決定	不思議・発見・感動・驚き等 から、自分の意思でめめて を持って探究しようとする。	自分で見つけた課題に対し、め あてを持って積極的に探究活動 をする。	自分で見つけた課題に対し、目的意識を持って粘り強く探究活 動をする。	自らの行為に責任を持って意志決定し、よりよく問題解決す るために自ら考え、想像力を発揮し、探究活動に取り組む。
	計画実行	活動に必要なものや場所等 をよく理解し、よく考え、計 画的に行動する。	目標を設定し、具体的な課題解 決のための見直しを持ち、簡単 な計画に基づいて活動する。	日常生活を振り返りながら、自分の課題と向き合い、目標を明確 にし、具体的探究方法を明示した計画により活動する。	目標を明確にし、具体的な課題解決に向けた仮説を立て、探究 の計画に修正を加えながら、課題の解決に向けて計画的に行 動する。
	自己理解	できるようになったこと、頑 張ったことに気づき、失敗を 次に生かす。	自らの生活の在り方を見直し、実 践する。	自らの生活の在り方を見直し、日常的に実践する。	自らの生活の在り方を見直し、改善に向け日常的に実践する
	将来・展望	もっと調べたい、行ってみ たい、聴いてみたいという気持 ちを持つ。	今の自分を見つめ、これからの 自分を想像し、高めようという思 いを持つ。	今の自分を見つめ、自分と対話し、どうあるべきかを考え、前進 しようとする。	学習の成果から、社会の一員として学ぶことの意味や価値を考 えとともに、自分の良さや可能性に気づき、将来や人生につ いて考える。
他者や社 会との かかわり に 関すること	他者理解	自分と違う意見にも耳を傾 け、違いを知る。	互いの意見を大切にし、認め合 うこととお互いを高め合うことを 知る。	自分と他者との違いや立場を考え、他者の考えを受け入れる。	他者の立場や意図を考え、受け入れ、尊重し、異なる視点から 考えることが、互いの考えを深めるということを感じとる。
	協同・共生	自分と異なる見方、考え方 を知り、友達や先生と協力し ながら体験活動等を行う。	仲間と力を合わせて活動し、課 題を解決する。異なる意見、視点 を気付かせることが課題解決の 糸口につながる場合があること を知る。	多様な情報の入手・異なる視点での調査等、探究活動の利点を 活かし、協同して取り組むことで、課題解決につなげる。	一人では解決できなかったり、実現しなかったりすること、 互いの特徴を生かし、協同的に学ぶことによって、課題解決が できるということを実感し、共生の意味を理解する。
	社会参画	仲間と共に活動することの 大切さ、楽しさを知り、仲間 のために活動する心が芽生 える。	専門家や地域の方々との交流を 重ねる中で、自分が社会の一員 であることに気づき、課題の解 決に向けて活動する意味を知 る。	グループや集団で学習をすすめて、専門家や地域の方々との 交流等を行った中で、社会に貢献する自覚を持つ。	社会の中の自分に気づき、将来の自分や自分が生きている地域の 未来について考え、地域等の課題の解決に向けて、社会活動 に参画する自覚を持ち、よりよく生きようとする態度を育む。

表4 「宇治学」部会作成

第3学年 単元指導計画 「宇治茶のステキをつたえよう」 (35時間)

【単元目標】

ふるさと宇治の特産品「宇治茶」について関心を持ち、「宇治茶」の魅力を進んで調べ発信しようとする。

過程	学習活動	具体的な学習活動等																
	利用	<div>発見！ 宇治茶</div> <div>・「宇治茶のステキをつたえよう」の学習の流れをつかむ。 ・事前学習として、家族に「宇治茶」について知っていることを尋ね、学習カードにまとめ、発表する。 ・「宇治茶は高級茶で有名だ」</div> <div><発問例> ・「宇治茶と言え？ イメージは？」 ・「どんな茶を知っているかな？」 ・「普段飲んでいるお茶は何？」 ・「お茶を使った食べ物にはどんな物がありますか？」</div>																
課題設定 (11)	宇治茶を知る (いろいろなお茶があることを知る)	<div>いろいろなお茶を のんでみよう(宇治茶を味わおう)</div> <div>(茶葉を触って、におって、見て、飲んで、食べてみよう。一視覚・触覚・嗅覚・味覚を使って)</div> <div>○手にとって茶葉の香りをかいでみよう。 ○茶葉を触って、感じてみよう。 ○茶葉をよく見てみよう。(形は、色は、大きさは) ○今度は、お茶を飲んでみよう。(においは、色は、味は) ○茶葉を食べてみよう。(味は、においは、) ○日本茶は摘み取り方法や加工方法によって種類が変わり、宇治茶は商標登録されていることを知る。(※1)</div>																
	抹茶を飲もう	○宇治茶で有名な「抹茶(てん茶)」を飲む。 ・他のお茶との違いを見つける。 (味・色・香り・茶葉)																
	宇治茶作りを体験する	<div>お茶作りを体験しよう</div> <div>○共通体験として、次の体験・見学をし、さらに宇治茶についての興味・関心を持つ。 ※可能であれば、児童に選択させる。または、学校として可能な体験・見学を統一して実施する。</div>																
		<div>茶摘み体験</div> <div>・茶畑に行き、茶摘みの方を教わり、茶摘み体験をする。</div> <div>○感想を出し合い、それぞれの感想や体験から、気づいたことをまとめる。</div> <div>茶畑を見学</div> <div>・お茶の木、茶葉の様子、茶畑の様子などを観察する。</div> <div>手もみでお茶づくり</div> <div>・ホットプレートを使用して茶葉でお茶を作って飲む。</div> <div>茶工場見学</div> <div>・茶工場・茶業研究所の見学</div>																
	宇治茶について調べたいことを考える	<div>宇治茶のステキを調べよう</div> <div>○宇治茶について、さらに知りたい・調べたいことを考える。 ※学校の実情や児童の実態等を考慮し、テーマを設定させる。 (テーマ例)</div> <table><tr><td>「茶工場の見学(お茶の作り方)」</td><td>「お茶のスイーツ」</td><td>「お茶作りの工夫や努力」</td></tr><tr><td>「宇治茶の歴史」</td><td>「お茶の効能」</td><td>「世界のお茶」</td></tr><tr><td>「おいしいお茶の入れ方」</td><td>「お茶作りの道具・機械」</td><td>「お茶の手もみの仕方」</td></tr><tr><td>「茶道の作法」</td><td>「お茶の種類」</td><td>「お茶の味・香り」</td></tr></table>	「茶工場の見学(お茶の作り方)」	「お茶のスイーツ」	「お茶作りの工夫や努力」	「宇治茶の歴史」	「お茶の効能」	「世界のお茶」	「おいしいお茶の入れ方」	「お茶作りの道具・機械」	「お茶の手もみの仕方」	「茶道の作法」	「お茶の種類」	「お茶の味・香り」				
「茶工場の見学(お茶の作り方)」	「お茶のスイーツ」	「お茶作りの工夫や努力」																
「宇治茶の歴史」	「お茶の効能」	「世界のお茶」																
「おいしいお茶の入れ方」	「お茶作りの道具・機械」	「お茶の手もみの仕方」																
「茶道の作法」	「お茶の種類」	「お茶の味・香り」																
情報収集 (8)	課題を調べるための手段を決める	<div>宇治茶をさがろう</div> <div>○調べ方を考えよう(決めよう) ○学習計画を立てる。 (調べ方例)</div> <table><tr><td>「インタビュー(専門家や身近な人)」</td><td>「見学」</td><td>「図書で調べる」</td><td>「歴史資料館学芸員による講演」</td></tr><tr><td>「宇治市茶業協同組合員」</td><td>「社会人講師」</td><td>「お茶屋さん」</td><td>「(インターネット)」</td></tr></table> <div>「体験:抹茶・茶香服など」</div> <div>○自分の課題・知りた内容によって、どのように調べるのか(何を誰に尋ねるのか)を考える。 ※可能な限り、専門家・社会人講師等を学校に招き、直接インタビューできるように事前調整する。 (※ 本やインターネットではなく、できる限り直接的な体験で)</div> <div>○宇治茶のステキをさがするために、計画に沿って情報を収集する。(個人・グループ)</div>	「インタビュー(専門家や身近な人)」	「見学」	「図書で調べる」	「歴史資料館学芸員による講演」	「宇治市茶業協同組合員」	「社会人講師」	「お茶屋さん」	「(インターネット)」								
「インタビュー(専門家や身近な人)」	「見学」	「図書で調べる」	「歴史資料館学芸員による講演」															
「宇治市茶業協同組合員」	「社会人講師」	「お茶屋さん」	「(インターネット)」															
整理分析 (6)	宇治茶の調べたことを整理し、まとめる。	<div>ステキがいっぱい！わたしたちの宇治茶</div> <div>○調べたことをまとめよう(整理しよう)(個人) ○グループで協働し、発表に向けて収集した情報を整理する。 ・比較、分類、関連付け、類推などの方法により、伝えたいことに沿って調べてきた情報を整理・分析する。 ※必要ならば(可能であれば)、再取材の計画を立て再取材する。</div>																
まとめ・表現 (10)	宇治茶のステキをまとめ、交流する	<div>宇治茶のステキを交流しよう</div> <div>○整理・分析した「宇治茶のみりよく」を、分かりやすい言葉で表現し、まとめる。 (まとめ方の例) 「新聞作り」 「ペーパーサート」 「パンフレット作り」 「クイズ」 「紙芝居」 「劇」 「実演」</div> <div>○発表の仕方を考え、発表練習をする。 ○自分たちが調べまとめた「宇治茶のみりよく」を、学級のみんなに発表し交流する。 ○他のグループの発表を聴いて、気が付いたことや考えたことから、「宇治茶のステキ」は、何か考え、学級の意見をまとめる。</div>																
	宇治茶のステキをつたえよう	<div>宇治茶のステキをつたえよう</div> <div>○自分たちでまとめたものの改善と、発表練習を行う。(必要により再取材) ○もっと多くの人に、学級で見つけた「宇治茶のステキ」を発信する。</div> <div><取組視座> ・児童から保護者や地域等への一方的な発信ではなく、双方向の交流や取組につながるようにしたい。</div> <div>(発表の内容例)</div> <table><tr><td>「宇治茶のスイーツ新メニュー発表」</td><td>「お茶会をしよう」</td><td>「家族とお茶を飲もう」</td><td>「地域の人に知らせよう」</td></tr><tr><td>「お茶の木を植えよう」</td><td>「宇治市に提言」</td><td></td><td></td></tr></table> <div>(発表の場の例)</div> <table><tr><td>「体育館でのグループブース発表」</td><td>「全校集会や学習発表会」</td><td>「参観日」</td><td>「地域の集まりでの発表やお茶の接待」</td></tr><tr><td>「地域でのポスターや新聞掲示(掲示板等)」</td><td>「地域の福祉施設での訪問発表とお茶の接待」</td><td></td><td></td></tr></table> <div>※発表の場として、授業参観・学習発表会等を活用する。また、PTCなどで保護者とともに、喫茶の体験をすることなども考えたい。</div> <div>○活動を振り返り、「宇治茶のステキをつたえよう」の学習をまとめる。 ○家庭での実践へつなげていく。</div>	「宇治茶のスイーツ新メニュー発表」	「お茶会をしよう」	「家族とお茶を飲もう」	「地域の人に知らせよう」	「お茶の木を植えよう」	「宇治市に提言」			「体育館でのグループブース発表」	「全校集会や学習発表会」	「参観日」	「地域の集まりでの発表やお茶の接待」	「地域でのポスターや新聞掲示(掲示板等)」	「地域の福祉施設での訪問発表とお茶の接待」		
「宇治茶のスイーツ新メニュー発表」	「お茶会をしよう」	「家族とお茶を飲もう」	「地域の人に知らせよう」															
「お茶の木を植えよう」	「宇治市に提言」																	
「体育館でのグループブース発表」	「全校集会や学習発表会」	「参観日」	「地域の集まりでの発表やお茶の接待」															
「地域でのポスターや新聞掲示(掲示板等)」	「地域の福祉施設での訪問発表とお茶の接待」																	

※1 宇治茶とは、「京都府、奈良県、滋賀県、三重県の4府県産茶を京都府内業者が京都府内において宇治地域に由来する製法により仕上加工した緑茶」をいう。(商標登録)

表5 「宇治学」部会作成

第6学年 単元指導計画

「ふるさと宇治の魅力 大発信」 (35時間)

単元目標 ふるさと宇治の歴史・文化や自然などについて関心を持ち、ふるさと宇治の魅力を進んで調べ、より良い宇治づくりを考え、発信しようとする。

過程	学習活動	具体的な学習活動等
課題設定 (10・15)	宇治の観光地と歴史的建造物・史跡を見学する。	<p>宇治の魅力って何だろう</p> <p>○「ふるさと宇治の魅力 大発信」の学習の流れ・ゴールイメージ(誰に、何を発信するのか)をつかむ。 ※ここでいう魅力とは、宇治の自然、産業、歴史、人・ふれあい等をさす。</p> <p>○宇治が観光のまちであること、世界遺産があるまちであることに気付く。 (京都市に次ぐ府内第二の観光のまち＝宇治) ・府内市町村別の観光客数を調べよう。 ・観光客がたくさん来るところを調べよう。</p> <p>宇治の観光スポットにふれよう</p> <p>○宇治の観光地(世界遺産・歴史的建造物・史跡)を見学する。 ・事前調べをしよう ・質問をまとめよう ・何故人が集まるのだろうか</p> <p>※ 宇治橋・平等院通り・平等院・府立宇治公園(中の島)・鶴飼い宇治神社・宇治上神社・大吉山(宇治遠望)・興聖寺・太閤堤・源氏物語ミュージアム・天ヶ瀬ダム・三壺戸寺・万福寺等のいくつかをコースに見学する。(平等院・宇治上神社は必須にしたい)</p> <p>○見学して気付いたことを交流する。</p> <p>私たちの住む町(宇治)の魅力を、もっと知りたい 見つけたい (※宇治の観光地を、もっと知りたい 見つけたい)</p> <p>※宇治の観光地・・・出来る限り自分の住む町について課題設定し探究させたいが、場合により宇治の観光地について課題設定、探究することも想定し追記している。</p> <p>見つけたこと、知ったこと、気付いたことを発信したい...〇〇さんに伝えたい</p>
情報収集 (6)	私たちの住む町(宇治)の観光地について調べたい魅力を考える。	<p>私たちの住む町(宇治の観光地)の魅力や課題はないだろうか？ 調べてみよう。 (自分の調べたい内容を決める) ・先の見学場所を含め、自分の住む町(宇治の観光地)の魅力や課題を探し、調べる。 ・神社仏閣、景観、場所、歴史、物語、産業、お茶、土産、行事・催し、祭、人物などが考えられる。</p> <p>○それぞれの体験から学びを交流し、気付いたことやさらに知りたいことや課題を見つけ出す。 ・対象の概要のみでなく、それを支える・受け継ぐ人々の苦勞や願いにも追及させる。</p> <p>私たちの住む町(宇治)の魅力を、もっと知りたい 見つけたい (※宇治の観光地の魅力や課題を見つめたい)</p> <p>私たちの住む町(宇治の観光地)の魅力を探ろう</p> <p>○私たちの住む町(宇治の観光地)の魅力、課題(気になること・疑問)について調べる計画を立てる。 (調べ方例) 「インタビュー(専門家や商店、観光客、身近な人)」 「見学等」 「図書で調べる」 「アンケート調査」 「公共施設で調査」 「インターネットで調べる」 「歴史資料館学芸員に教えていただく」 「宇治市茶業協同組合で調査」 「市役所担当課」 「社会人講師に教えていただく」 「地域の古老からの聞き取り」</p> <p>○私たちの住む町(宇治の観光地)の魅力や課題(気になること)を、計画に沿って調べる。 (個人・グループ) ○協力して調査する。</p> <p>私たちの住む町(宇治の観光地)には、魅力がいっぱい!</p>
整理・分析 (4)	私たちの住む町(宇治)の観光地について調べたことを整理・分析し、自分の考えを深める。	<p>私たちの住む町(宇治の観光地)の魅力は これ!</p> <p>○自分たちが調べてきた情報の中から、発信対象に分かりやすく、また自分たちの主張・主題に合う資料、写真などを選び、必要な情報を整理する。</p> <p>○収集した情報を、多様な思考スキル(比較、分類、関連付け、構造化、理由付け等)で、様々な思考ツールを用いて分析する。 (視点の例: 大切にされてきた理由は何が、受け継がれてきたのはなぜか。 多くの人が集まる理由は何が。 等) ・思考段階で十分な情報があれば、再取材を行う。</p> <p>私たちの住む町(宇治の観光地)の魅力を受け継ごう・伝えよう</p> <p>○整理した情報を基に、より良い地域・宇治にするために「地域のためにできること、自分たちができること」は何かを話し合い、考えを深める。 ・自分たちが調べ整理してきた課題を踏まえ、もっと多くの人に、宇治や地元の良さとともにより良い地域や宇治づくりに向けての改善意見や提案を考えさせる。</p> <p>私たちの住む町(宇治の観光地)の魅力をみんなに伝えたい</p>
まとめ	資料をまとめ発表する。	<p>私たちの住む町(宇治の観光地)の魅力を交流しよう</p> <p>○整理・分析した情報を、発表相手にわかりやすく伝えられるようにまとめる。 (まとめ方の例) 「新聞作り」 「クイズ」 「劇」 「プレゼンテーション(パワーポイント等)」 「パネルディスカッション」 「パンフレット作り」 「ビデオレター」 「ディベート」</p> <p>○自分たちが調べまとめたことを、学級で発表し交流する。</p>

表	現	(10	と	15)

○他のグループの発表を聴いて、気が付いたことや考えたことから、自分たちが住んでいる地域や宇治の良さに気づく。
 ○より良い地域・宇治にするために「地域のためにできること、自分たちができること」を学級でまとめ、その取組方法等について交流しまとめる。

「ふるさと宇治の魅力 大発信」

○自分たちが調べ整理してきた課題を踏まえ、もっと多くの人に「ふるさと宇治の魅力」とともにより良い地域や宇治づくりに向けての改善意見や提案もさせていきたい。
 ○発表に向けて、再取材と内容の改善を行う。

＜取組視点＞

- ・自分たちのしたことが「喜ばれる」「採用される」という達成感や成就感を味わえるように工夫したい。
- ・児童から保護者や地域等への一方的な発信ではなく、双方向の交流や取組につながるとなお良い。

(発信の内容例)

- ・私の大好きなまち○○ ・地域のお宝発見 ・観光宇治へ ・こんな街に ・宇治市への提案 ・家族と宇治を再発見
- ・宇治検定 ・英語でおもてなし

(発表対象)

- ・全校児童 ・保護者 ・地域の方 ・観光客 (・HPならば全国、世界) が考えられる。

(発信の場の例)

- ・「体育館でのグループブース発表」「ポスターセッション」
- ・「全校集会」「参観日や学習発表会」
- ・「地域の集まりでの発表」「地域でのポスターや新聞掲示(掲示板)、回覧板」
- ・「ホームページ」
- ・「子ども議会」
- ・「商工会議所や観光協会、関係機関への提案」
- ・「観光客へのパンフレット配布」

○学習を振り返り、「ふるさと宇治の魅力 大発信」をまとめる。
 ○家庭や地域での実践へつなげていく。
 ※(例)「観光客の皆さんが気持ちよく訪れる宇治＝自分たちの地域を美しく」など
 ○次の課題設定に向け、「宇治市の人口推移のグラフ」を提示し、児童の意識の高まりを促す。
 (「ふるさと宇治」への意識が高まってきたところで、将来的に減少傾向にある人口推移等を知らせ、児童の思いとのギャップが生じることにも触れる。)

の観光産業を考え、さらに観光客が多く来る理由をさぐり、校区の三室戸寺について探求する学習として進められた。

この実践は、学区に三室戸寺のような名所・旧跡がある学校での実践であり、同様に観光客が多く訪れる平等院周辺の中宇治地区などでも、学習の有効性は高いと考えられる。しかし、それ以外の地域の学校の場合は、世界遺産が生徒たちの生活圏ではないことや、探求的な学習をめざす活動を取り入れにくい点などが指摘された。議論の中では、宇治市民である以上、世界遺産である平等院をはじめとした中宇治地区の観光スポットについて、生徒が今後人生を歩む中で、さまざまな人と会う際に、宇治出身である以上は世界遺産などを説明する場面もありうる、といった意見もあった。そのため折衷案として、課題設定の段階で中宇治地区を訪れ、世界に誇る宇治の中心部の理解を深めた後に、次の段階で学区の地域の理解と課題追究をすることとなった。

重点単元テーマも3回の会合での活発な議論により、「大好きなまち宇治(観光)」から「宇治のおすすめ 大発信」、さらに「ふるさと宇治の魅力 大発信」と変化をしている。

それぞれの学習過程についてみると、「課題

設定」については観光地としての宇治を理解するところから始まり、学校で中宇治地域に訪問して「ふるさと自慢」を探し、人々にインタビューすることが想定されている。

次の段階として、宇治だけでなく学区地域の宝物(魅力)を再発見し、調べることになっている。この段階では、観光資源や名所旧跡にあたるものがない学区の小学校では、指導に苦慮することが予想される。しかし、議論の中では、平成27年8月に本学の鶴飼教授によって行われたフィールドワーク研修での手法を取り入れることで確認されている。この研修は、有名なものがこれとってない学区でも出来る研修と銘打ち、大久保小学校の学区で実施された。市内の小・中教員が1時間程度のフィールドワークに出かけ、様々な視点から町の再発見をした。特に洪水の石碑を見つけた教員グループは、地元在住の高齢者から「現在の道路がかつて河川であり埋め立てられた」といった貴重な情報を聞き出すことに成功するなど、教員の中でも手応えを感じた研修の成果が、実際の授業でも発揮されることと思われる。

なおこの単元は、小3～4年次の社会科で実施される「まちたんけん」や「市町村調べ」とも重なる。

この点は、教科で学んだことを総合的な学習で発展させ、「地域のためにできること・宇治のために自分たちができること」を考え、さらに9年生（中学3年）の学習に生かすことが想定されている。

単元では課題設定の後に、「情報収集」や「整理・分析」、「まとめ・表現」段階となるが、第6学年の今後の課題については、下記の3点が指摘される。

1つ目は、情報収集の段階で、地元を語ることができる人材とのパイプについて、人脈を学校で長期的に共有化できるかどうかである。特に地元とのつながりは、管理職だけに任されている学校が多く、一般教員は異動もあり、持続可能な結びつきが課題といえる。

2つ目としては、「整理・分析」時の分析方法である。これについては、1つの地域のいくつかのテーマを合わせて分析する方法と、いくつかの地域の1つのテーマを重ねて分析する方法がある。このような分析の違いを副読本に盛り込んだ際に、実際の現場教員が活用できるか、地理学的な地域分析の手法が必要な点である。

3つ目には、発表の手法である。小学校の最終学年としてふさわしい発表は何か、それまでの蓄積を生かした発表が望まれる。昨今、パワーポイントによる発表を小学校でも実践しているケースが多いが、それらに頼ることなく進めることも重要である。（澤達大）

10 副読本作成以外の「宇治学」の取組（2014年度）

（1）総合的な学習「宇治学」の発表 2014年12月20日実施

京都文教学園の創立110周年を記念した「ともいきフェスティバル」で、宇治市の小中学校の「総合的な学習」で取り組んでいる「宇治学」の取組の発表を行った。

宇治茶を学んできた北小倉小学校3年生は、「子ども茶席」でお手前を披露し、約100名の来客に対して、宇治市内産のてん茶で抹茶を点てて振る舞った。

「子ども茶席」でお手前を披露

する小学生の子どもたちにとっては、実際に経験することで、お茶席のしきたりやマナーを



写真1 「子ども茶席」でお手前を披露する小学生

学ぶだけでなく、人をもてなす心や気遣いなどを学ぶことができ、貴重な体験の場となった。

観光をテーマに取り組んだ三室戸小学校5年生は、自分たちの住む三室戸校区の菟道・明星町・志津川地区での現地学習の成果を発表した。観光客の増加に伴うゴミのポイ捨て、野生動物による被害、若者の人口流出など、地域の課題を掘り下げ、自分たちで考えた解決策を提案した。地域学習を通して、子どもたちは、地域の住民が問題解決に向けて協力している姿に触れ、地域の絆の大切さを感じることができた。同時に、自分たちも地域の一員として、地域のことをもっとよく知り、自分たちにもできることを実践してみようという意欲を持つことができた。そのことにより、地域社会の一員としての自覚が生まれ、地域に対する愛着や誇りが生まれる。次代の地域を担う子どもたちにこうした思いや願いを感じさせることが「宇治学」の目的の一つとなっている。

北横島小学校の6年生は、修学旅行の様子を新聞にまとめた。新聞を作ることによって、体験したこと、学んで分かったこと、考えたことなどを、多くの人に発信することができる。また、限られた紙面にまとめることにより、学びなおしの機会となり、学習したことをふり返ることができる。

（2）子どもたちがつくる「ふるさと宇治検定」2014年12月20日実施

同じく「ともいきフェスティバル」で、「ふるさと宇治検定」を行った。京都検定など、各地のご当地検定が数多くあるが、他のご当地検

定との違いは、問題を子どもたちが作るということである。

子どもたちは、宇治に関する問題を考えることを通して、「宇治学」の学びに関心を持つことができる。たくさんの問題を作れるということは、それだけ自分たちの住んでいる宇治に関心が高まっているということになる。そして、「ふるさと宇治検定」を受け、どの程度自分が宇治のことを理解しているのかを知ることできる。このように、「ふるさと宇治検定」は、「宇治学」での学びの意識づけの機会となる。

(3) 宇治学フォーラム「未来に残し伝えていきたい宇治学」 2015年2月15日実施

宇治学フォーラムを本学で開催し、約80人の市民が参加した。このフォーラムは、本研究活動を広く地域に広報し、理解を得るとともに、問題意識を共有し今後の研究活動の推進に役立てるために開催したものである。

フォーラムでは、宇治茶関係者、観光関係者、行政、研究者が登壇し、それぞれの立場で、「未来に残し伝えていきたい宇治学」というテーマで、「宇治学」について語ってもらい、議論した。

副読本作成の推進役である市橋公也・市教委総括指導主事（当時）は、「宇治学」副読本は、教員の負担を軽減するとともに、探究的な学習を行い、次代を担う人材を育成するための必要な教材であると、その意義を強調した。平野正人・市歴史まちづくり推進課参事は、秀吉が築いた宇治川太閤堤跡を例に挙げ、新たな宇治の魅力を発信することが必要であると述べた。多田重光・市観光協会専務理事は、市民自らが宇治の魅力を自覚し、市内を案内できるようになることが重要であると指摘した。通円裕介・株式会社通圓二十四代当主は、市内の子どもが他地域の子どもと比べてお茶に詳しいことに触れ、宇治学の成果は出ていると話し、継続に期待を示した。地域協働研究教育センター長でもある森正美教授は、最近の学生の印象を基に、体験を重視するPBL型学習の重要性を示した。また、「宇治学」が宇治のことに留まるローカルな学習ではなく、そこを起点にグローバルな視点を持った学習になることが重要であると指摘した。

フロアからは、「どういう基準で宇治学の成

果があったと評価するのか」「子どもから大人までが宇治のことを議論する宇治学学会を作ればいいのではないか」など、多数の意見や質問が出た。このフォーラムにより、多くの人に「宇治学」に関心を持ってもらうことができ、宇治の魅力について改めて考えるきっかけになった。

(4) まちづくりミーティング 2015年2月20日実施

地域住民、行政、NPO、学生、教員らがグループとなり、「宇治学」について議論した。市橋公也・市教委総括指導主事からの「宇治学」の概略についての話題提供の後、子どもたちが地域のことを学ぶ、見方を変えれば、地域が子どもを育てるには、どういったことが必要なのかを議論した。

何をどう学ぶかということ以前に、地域の人と子どもたちが交流する機会が減っているという現状が課題として挙げられた。子どもだけでなく、世代間交流も少なくなり、地域コミュニティが十分に形成されていない状況にある。これは宇治だけでなく、全国的に見られる現象である。だからこそ、学校教育の中で「宇治学」のような地域学習を行うことにより、地域コミュニティの形成のきっかけとなるのではないかという意見が出た。

(5) 研究視察 青森県下北郡東通村 2015年2月24日～25日実施

青森県下北郡東通村に研究視察に行った。視察により、小中一貫教育を積極的に推進しており、小中一貫教育の取組内容を学ぶことができた。東通村では、小中一貫教育の取組の一つとして、総合的な学習で、独自のカリキュラムを作成しており、「宇治学」のカリキュラム作成の参考となった。総合的な学習で活用する独自の資料集を小中一貫で作成しており、副読本の内容、構成などを学ぶことができた。

また、副読本作成のための体制やスケジュール、事務的な手続きなど、副読本作成のための運営上のことについても、教育委員会を通して学ぶことができた。

副読本作成とは直接関係はないが、先進的な小中一貫教育の学校の取組を視察できた。

（橋本祥夫）

11 おわりに

「宇治学」副読本が最終的に完成するのは、平成30年度末の予定である。「宇治学」副読本を活用して、児童・生徒にどのような力がついたのかを検証するには、まださらに時間を要する。PDCAサイクルで、副読本、ワークシート、指導資料集、指導計画等も見直していかなければならないだろう。したがって、本研究は息の長い研究となる。

本年度は、本研究を始めてまだ2年目であり、研究の初期段階である。1章で述べた通り、息の長い研究だからこそ、研究成果の記録を残しておくことが重要である。本稿で述べたことは、現時点での研究に基づくものであり、それは今後変わることもありうる。しかし研究をさらに進め、研究目的を達成するために、変えることを恐れてはいけな。たとえ変わることがあったとしても、それも含めて研究の成果である。試行錯誤があるからこそ、よりよい研究成果を生むことができる。

本研究の意義と課題を以下に述べる。

(1) 本研究の意義

各学年部会で「宇治学」の単元構想を考えるにあたり、「宇治学」で何を重視すべきか、「宇治学」とはどういう学習であるべきかという、基本理念について考えを深めることができた。また、「宇治学」の指導計画の検討に伴い、学習過程についての共通理解ができた。

自ら課題意識を持つための体験活動や問題意識を深めたり調べたことを整理したりするための思考ツール、グループで問題を解決するなどの協働的な学びなど、学習過程で重視している探究的な学びは、次期学習指導要領でも重視されているアクティブラーニングでもある。本研究は、今後ますます重要になると考えられるアクティブラーニングの学習の提案でもある。

共同研究という点では、大学教員の専門領域を生かし、「宇治学」の意義を幅広い視野から検討することや、「宇治学」で重視するフィールドワークの基本的な考え方や方法について検討することができた。また、教育学を専門とする大学教員と教育委員会指導主事、小中学校の教員が同じ会議で議論し、内容を検討すること

で、幅広い視野から「宇治学」の内容を充実させることができた。

副読本の作成に関しては、宇治市が契約した教科書を作成している出版社（日本文教出版）に毎回編集会議に参加してもらい、議論に加わってもらうことにより、これまでの教科書作成のノウハウを生かすことができ、より充実した副読本、指導資料集の作成をすることができることとなった。

宇治市挙げての取り組みということで、教員はもとより、市民にも「宇治学」についての関心が高まってきている。「宇治学」は地域社会を教材化するため、地域の様々な協力を得ながら、「宇治学」を創り上げていく。したがって、学校教育の範囲を超え、広く地域社会と協働的に取り組む活動となっている。

(2) 本研究の課題

次期学習指導要領で小学校高学年の教科「外国語」（英語）の新設と、「外国語活動」の中学年実施の方向が公表されている。この指導時間については、現在週当たり2時間実施している総合的な学習への影響も懸念される。教育課程の中で、総合的な学習としての「宇治学」の時間をどのくらい確保することができるのか、国の動向を睨みながら対応することが今後の課題である。

総合的な学習は、教科横断的な学びや教科で学んだことを生かすことが求められている。宇治学と他教科との関連や系統性をどのように図っていくかは今後の検討課題である。

各校はそれぞれ地域の実態が異なり、全市で行う「宇治学」として、どこまで共通に行うことができるのか、各校の独自性をどこまで盛り込むことができるのか、編集段階で様々な意見を吸い上げて調整していくが、実際に副読本が完成して、副読本をもとに取り組んでみないと見えない部分もあり、今後、「宇治学」副読本を学校現場でどのように活用するのかを指導する必要もあると考えるところである。

（橋本祥夫・市橋公也）

注

- 1) 全国1,743市区町村で1,130件実施されている。
(2014年5月現在, 文部科学省調査)
- 2) 宇治市立全小・中学校の小学5年生から中学3年生の児童生徒と保護者に対して実施。
- 3) 「授業はそれまでに習ったことや中学校で(これから) 習うことにふれて進められていると思う。」という問いに対し, 肯定的回答(「そう思う」「だいたいそう思う」)が全体で81%。
- 4) 「地域のことを学習したり, 地域の人たちといっしょに活動する学習をしていると思う。」という問いに対し, 肯定的回答(「そう思う」「だいたいそう思う」)が全体で53%。
- 5) 文部科学省「小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間」東洋館出版社, 平成20年8月, pp10-11.
- 6) 平成26年度「宇治学」実施計画案一覧表
- 7) 道徳の時間, 特別活動(学級活動), 総合的な学習を統合して, 品川区では市民科, 青森県三戸町では立志科をつくっている。
- 8) 千葉県では「ちば・ふるさとの学び」, 川崎市では「かわさき」, 青森県東通村では東通学「東通科」資料集, 久留米市ではくるめ学副読本「久留米」を作成している。
- 9) 「立志科」では, 育てる力(3観点5領域10能力)を設定している。
- 10) 「ちば・ふるさとの学び」指導資料, 平成21年3月
- 11) 文部科学省「小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編」東洋館出版社, 平成20年8月, 第4章指導計画の作成とその取扱い」の解説文引用
- 12) 同上